Let Me Die ～転生先はゾンビ少女～

内臓破裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｅｔ　Ｍｅ　Ｄｉｅ　～転生先はゾンビ少女～

【Ｎコード】
Ｎ９１１５Ｘ

【作者名】
内臓破裂

【あらすじ】
永遠の眠りに着く事を願って命を絶った少年は、ファンタジーの世界に転生した――ただし、処刑されたお姫様の死体に憑依という形で……
心の底から死を望む彼にとって第二の人生は迷惑以外の何物でもなく、チートと呼んで相違ない能力のせいで易々と死ねない体質の彼は『死ぬ方法』を探すべく、自分を殺しに来た死神の少年と共にアンデット仲間を集めながら異世界を放浪する……そんなお話。
※主人公一同がほぼ全員アンデットだったり、初っ端からゾンビを

大量虐殺したり、主人公が中性的だったりと割とマニアックな内容ですので、苦手な方は注意してください、大好物だ！　という方は大歓迎です。

1．握り締めた鍵は不帰の烙印

Ｓｉｄｅ：黒ジャンバーの少年

地平線の向こうまで続く鉄道を踏みしめながら、よろめく体で前へ前へと歩み続ける少年。

紫色の夜空をオレンジ色に染める黎明の光に、永い永い夜を過ぎた少年はどっと疲れが押し寄せてくる様な気がして、ジャンバーのチャックを下ろし、薄い生地のシャツに包まれた体を夜明け前の冷気に晒した。

「どうして？

……どうしてこんなに美しいものを僕に見せるの？」

吐き出す息と共に漏れた心の呟きは白い息と共に凍えた空気に吸い込まれていく。

もとより返事など求めていない少年は眩しすぎる光から目を逸らすように俯せ、等しい感覚で敷き詰められた枕木を踏みしめ前へ進む。

幾つの枕木を踏み越えただろうか？

数えていないし、数える気もない少年は不意に鳴り響く汽笛の音――朝一番の発便を告げる汽笛――に機械的に動かし続けていた足を一瞬だけ止める。

一直線に伸びた鉄の道のすぐ傍、風に揺れる枯れ草を暫らく眺める少年。

小さな手に握り締めた、滲んだ汗にベトベトに濡れた二度と帰れない家の鍵にチラリと視線を流すと、興味を無くしたように少年は首を振り、フェンスの向こうの芝生に放り投げた。

帰れる場所はもう何処にも無いのに……ばっかみたい

イルカのキーホルダーに繋がれた二つの鍵が放物線を描いてから芝生に消えるのを見届けた少年は悲しげに笑うと、鉄道を揺るがす走行音を背中で感じながら再び歩き出した。

ガタッガタッガタッ、鉄道を伝って感じる振動が段々と大きくなる。近づく死神の足音に少年はどこか安堵したような表情を浮かべ、長い前髪の間から覗く虚ろな瞳を静かに閉じた。

やっと帰れるんだ、痛みも苦しみも悲しみも何もない、生まれる前の至福の闇に……

何かが体にぶつかり、グジャッ、と肉がひしゃげる音と骨が軋む音が体の中から響く。

簡入れずに体を襲う激痛に少年は声に成らない悲鳴を上げる。

だが、その悲痛の叫びは誰にも聞き取られる事なく、肉がひしゃげる音も、骨が軋む音も、無機質な走行音に全て呑み込まれて、消えた。

傍から見れば無慈悲でも、少年には慈悲深く感じられたかもしれない鉄の死神が過ぎた後、蔓延る闇を完全に掻き消した朝日に照らされた鉄道の一角に一輪の花が咲き誇っていた――鮮血に彩られた、残酷な花が。

誰からも賛美される事なく、揉み消される定めにあるその忌々しい赤い花だけが、少年がかつてこの世に居たと言う事実を静かに訴え続けていた。

――――――
――――
――

母を探し彷徨う仔犬は知らない、オモチャに親など無いという事を

――

＞ｉ３３５６８―３５４６＜
Ｌｅｔ　Ｍｅ　Ｄｉｅ　～転生先はゾンビ少女～

――
――――
――――――

Ｓｉｄｅ：蒼白の少女

　ぴちょん、ぴちょん。

石造りの天井から滲み出た水滴が湿った岩肌を打つ無機質な音が冷たい地下室の中に木霊する。

数階分に渡ってくり貫かれた、円筒状の空間は天井に当たる部分に

備え付けられたステンドグラスから差し込む冷たい光に照らされ、壁に沿って作られた螺旋階段に積もる埃も相まって酷く寂れた印象を与える。

石の壁に囲まれたこの空間だが、螺旋状の階段を下り切った先の地面は湿り気を含んだ土壌であり、無数に乱立した墓標がこの奇妙な空間の役目を明かす――地下霊園。

円形の霊園の中央でポッコリと盛り上がった小さな丘の上には石造りの祭壇があり、その上で一人の少女が静かに眠っていた。

――いや、眠っているように見えるが、華やかなドレスに包まれた華奢な体は微動だにせず、血の気が抜け切った蒼白の肌は彼女の命が既に終焉を迎えた事を告げていた。

生命の営みを終えた少女の瞼が、何の前触れも無く開く。

「――――」

死んだ魚の様な澱んだ目を泳がせ、天窓から差し込む寒光に眩しそうに目を細めた少女は乾いた喉の奥から声を絞り出す

「……ここは、何処？」

凛と響く声は冷たい石の壁に当たり、反響を繰り返しながら木霊する。

「僕は電車に轢かれて死んだ……そうでしょ？」

問いかける少女の言葉に答える者はいない――目の前に広がる高い天井とそこに描かれた二匹の赤い竜が絡み合った様な図形に思考を巡らせながら、少女は身を起こそうと手に力を込め、体が異常に重い事に気付く。

ほんの少し力を込めただけで骨が軋み砕けるような感覚、試しに手を握ってみると、手首から指先に掛けての関節がコキコキと乾いた音を立てた。

崩壊寸前の体をいたわる事無く、少年――少女は全身の関節をコキコキと軋ませながら身を起こし、澱んだ目を凝らして辺りを見回した。

石の壁に囲まれた空間、視線を降すと一面に広がる墓標が目に入り、ここが墓地である事を漠然と理解した少女はそれが自分がかつていた国、日本のものとかけ離れている事に首を傾げる。

「地獄、かなぁ？
……どうでもいいけど」

電車に轢かれて死んだ筈なのに眼を覚ませば見た事も無いような構造物の中にいる、その上体の調子がどうもおかしい――だというのに自分が置かれている不可解な状況に別段驚く事無く、少女は呑気な声で思ったままの事を口にする。

後ろを振り向こうとして、髪が何かに引っ掛かり、おもむろに視線を落とした少女は石造りの祭壇に広がった白銀の髪に訝しげに目を細める。

あれ？　こんなに長かったっけ、僕の髪……

そういって長さの割にはまるで重さを感じさせない髪を一束掬い取ってみる。

ひんやりと冷たい感触が掌を伝い、広げた指の間から白い艶髪が流れ出す。

こんなに長い髪を見た事は一度もない、その髪を掬う白く繊細な指先も、冬の乾燥に耐え切れずかぶれた自分の手とは違う。

――まるで女の人みたい、細い手首を包む袖口に施された宝石の装飾をぼんやりと見つめ、少女は思う。

クルッと手首を回しただけで１２個もの宝石が袖口に付けられている事が解かった。

そしてその袖を辿って腕へ、腕を辿って胸へ視線を移した少女は更に首を傾げる事になる。

これっておっぱいだよね、女の人の――何でこんな物が付いてるの？

僕は男だよ……？

俯せた視界に映るのは二つの小さな丘。

大きくは無いが、『女性の胸がある』という事を訴えるには十分な大きさだ。

自分の体に追加された見覚えの無いオプションに思考を巡らせながらさり気無く手を両足の付け根に当てる、が、有るべきものが無い事に気付き、訝しげに細めていた目は更に細められる。

これってどういう事？　僕は女の子に成っちゃったの？

――死んだんじゃなくって？

「……どうでもいいや、もうすぐ死ねそうだし」

俯せた視界の端で蠢くものを捕らえた少女の表情が一瞬だけ強張る、が、すぐに仮面を付けたような感情の起伏が無い表情に戻る。

墓石を押し倒しながら這い上がってくる生ける亡者達。

「「「ぐぉぉおぉお怨ぉぉおぉおおん！！！」」」

腐乱した肢体を引き摺り、肉が剥がれ骨が覗いた彼らをまるで道端に生えた木を何となく眺めるような視線で捕らえる少女に向かって、生ける亡者達は朽ちた声帯を震わし、声に成らない獣の様な喚き声を上げた。

「ふぅーん、本当に地獄なんだ」

電車に轢かれて死んだ筈なのに目覚めたら体が女の物に成っていて、墓地の様なところに居る。

こんな非科学な現象を解釈出来るのはやはり非科学な言語だ。

「って事は意地悪なカミサマはどこかから僕を見て笑ってるのかな？

電車に轢かれただけじゃ面白くないから？
……ばっかみたい」

迫り来るゾンビの大群、腐乱した肉から放たれる胃の中が蒸しかえるような悪臭に眉を顰め、言葉で強がっていても心の奥底から湧き上ってくる恐怖を紛らわすように少女は目を閉じた。

「「「ぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！！」」」

まるで抵抗する意思を持たない獲物に生ける亡者達が歓声にも似たうめき声をあげ、飛散したゾンビの体液が少女の手に当たる。

「食べるのなら早くしてよ、気持ち悪い……」

『おう、じゃそうするわ』

独り言の心算で呟いた言葉に返って来た返事、直接心に響くような少年の声にきょとんと目を見開いた少女の目に映ったのは外れかけた顎を一杯に広げ、飛び掛ってくるゾンビの大群だった。

紫に変色した皮膚が破け、腐敗した肉が覗く手が少女の顔を鷲掴みにする――その刹那

「ぐぎゃぁぉぉぉぉん！！」

「……え？」

気がついた時には突き出したその手を両手で掴み、引き千切っていた。

ぐじょりとした不快な感覚が掌を伝う、が、それを手放そうとする少女の意識に反して体が勝手に動き、背後から組みかかって来たゾンビの口にそれを捻じ込んだ。

石榴のように爆ぜる腐った頭から慌てて視線を逸らした少女は自分の体が宙を舞っている事に気付く。

投げ飛ばされた訳でも、掴み上げられた訳でもない……またしても体が独りでに動いた。

まるで自分ではない誰かに体を操られているような不気味な感覚に目を細める少女を他所に、少女の体は天井からぶら下がったトゲトゲした飾りの付いたシャンデリアに飛び乗り、それを繋ぎ止めていた鎖を引き千切った。

支えを失い加速しながら落下するシャンデリア、あんぐりと口を開け、見上げてくるゾンビ達が目前に迫る――その直前、屈んでいた少女は体を弾ませ、落下するシャンデリアを勢いづけると同時に近くに居たゾンビに飛び掛った。

ゴシャァァァアアン！！

金属製の大質量体が地面を抉る音と腐った肉がひしゃげる音を背中に受け止めながら少女――の体は拳を捻り、牙を剥いてくるゾンビの胸部を打ち抜いた。

「ギャァオォオ！！」

耳をすんざくゾンビの断末魔と返り血のように飛来する腐敗した体液。

とっさに顔を逸らして回避した少女は自分を幾重に取り囲む亡者の大群を目の当たりにする。

仲間がやられた事に対する怒りか、それとも単に目の前の獲物を捕らえようとする本能か、一斉に少女に向き直るゾンビ達。

それを目で確認するよりも早く体が動き、拳を突き刺したままのゾンビの脊髄を掴むとそれをまるで武器か何かのように振り回し、安易に近づいてきたゾンビ達を薙ぎ払う。

飛散する腐液を浴びる前に飛びずさった少女は正面から振り下ろされたゾンビの拳を掴み、その勢いに逆らう事無く受け流し、背後から迫って来たゾンビの首に誘導した。

自身に向けられた攻撃を全て受け止め、有無を言わさぬ圧倒的な力でゾンビ達を捻じ伏せていく少女。

　こんな事をして何になるんだろう？

自分ではない誰かが体を動かしてくれているお蔭で目の前で起きている血生しい戦いをまるで他人事のように傍観していた少女は眩暈苦しく変化する眼前の光景をぼんやりと捉えながら自身に問いかける。

しかしその問いかけに答えるべき体は返答の変わりにぬめぬめとした不快な感触を手に纏わり付かせるだけだった。

「……ねぇ、どこかで見ている悪趣味なカミサマ、こんな事して楽

しいの？」

その問いかけに応えるように体を動かしていた力が消え、急に重たくなった体に付いて行けず少女は両手を地に着き伏した。

このままゾンビ達に美味しく食べられるのか、漠然とそんな事を考える少女だが、つい先程まで殺意を剥き出しにして襲い掛かってきた生ける亡者達もまるで糸を切られたマリオネットのようにその場に崩れ落ちていた。

『木偶どもじゃ太刀打ち出来ねぇってか？
……死体から生き返っただけの事はあるな』

不意に心の中に響く声、その声の主が上空に居るという事を何故か理解できた少女はおもむろに顔をあげる。

死んだ魚の様な白い目に映った声の主は血の様に赤いローブに身を包んでいた。

目深く被ったフードのせいでその素顔は窺い知れず、ステンドグラスから差し込む寒光に照らされて鋭い光を放つ、剣を束ねたような双翼が彼が人外の存在である事を知らしめる。

逆光によっておぞましくも神々しく感じるその姿に少女は見入るように立ち上がり、小さな口をゆっくりと開く

「なーんだ、死神か」

まるで道端から突然飛び出した犬に驚きはしたが、すぐにその正体

を見極めてどうでもいい反応を示すようなその口ぶりに、宙に浮いていたシルエットが４５度傾く。

『死神を目の前にしても平然としていられるとは……肝が据わってるな』

「じゃあ怖がった方がいいの？
あー怖い怖いー
……こんな感じで良い？　」

『ってめぇ、舐めてんのか！？
木偶共を倒したからって図に乗るな、本物の死神の恐ろしさを見せてやる！』

剣を束ねたような攻撃的な羽をはためかせ、空中で体勢を立て直した死神は声を荒げると、剣の様な羽毛を一本抜き取り、無表情のまま見上げてくる少女に突き出すと同時にトーンの低い声で呪文の様な物を唱え始める。

『……Товаетъженживот、【死の契約】』

複数の音節が重なった様な呪文は黒き光となり、突き出したその剣（はね）を経て少女を包み込む。

ぞぉっ、と心の底から湧きあがる、ガラスを噛み砕いてから呑み込んだような苦しみ。

体を駆け巡る親しみさえも感じるその苦しみを少しでも和らげようと無意識に胸に手を添えた少女に死神は勝ち誇ったような声を発する。

『【死の契約】はお前の心を蝕み死への渇望を最大限に引き出す。
これでお前は生を求めるのと同じぐらいに死を望むだろう！
どうだ、死にたいだろう？
色々とムカつく女だが……せめての情けだ、この剣で自裁させてやる、格好良く死ねよ』

そういって手を振りかぶった死神の袖口から黒光する剣が飛び出し、ぼんやりと彼を見上げていた少女の前に突き刺さる。

「……何が『せめての情け』だよ、こんな所に呼び出しておいてよくそん事言えるよね」

片手を腰に当てポーズを取ってる死神に文字通り白い目を向けると、少女は目の前に突き刺さった剣を引き抜こうと柄を握った、が――

ピキシッ、パリィィィイン！！

『……マジか』

力を込め過ぎたのか、握っただけで砕いてしまった剣の柄に死神は信じられん、と声を上げ、少女も苛立たしく目を細め残った部分を掴もうとするが、鋭い光を放つ剣身も同様に触った所から音を立てて崩れてしまう。

『その細っちぃ腕の何処にこんなぶっ飛んだ力があんだよ……』

目の前の剣を黒い砂鉄に変換し終え、どうして？　と言いたげな視線で見上げてくる上から下まで白一色の少女に死神は腰に手を当て、ブツブツと何か呟いたかと思うと、

『インチキ能力も大概にしろ！！』

叫ぶと同時に一瞬で袖から大量の剣を突き出し、肉眼では到底追いつかない速度で少女に奇襲を掛けた。

グザッ、グザグザグザッ！！

静まり返った広間に肉が抉れる音が木霊する。

銀色の血に手を染めた少女は無言のまま死神を見上げ、その口から流れ出た銀色の液体に白い目を細める。

『いってぇぇぇぇぇ！！』

剣に切り刻まれ、血を流していたのは死神の方だった。

少女自身悪気があった訳じゃない、そもそも早すぎて何が起きたのか理解が付いて行けなかった。

何故突進してきた死神が血を流しているのか、何故その体が刺さった剣でハリネズミみたいに成っているのか、何故自分の手にその内の一本が握られてるのか――

「……どうでもいいや」

よく分からないけど何だかんだでこの閑なカミサマに仕返しできたんだし

面倒な思考を早速放棄した少女は目の前で苦痛に顔を歪める死神の

姿をジト目で捉える。

遠くて見えなかったが、近くで見たその顔はどう見てもただの少年だ。

時代遅れのボサボサな黒いロン毛に小学生相手にカツアゲしてくる不良の様な目つき――死神と聞いてローブを着た髑髏を連想した少女は目の前の死神の素顔に興味が無くなったように握っていた剣の柄を手放す。

しかしその動作で剣を支えていた物が無くなり、重力に従って落下した剣はカツアゲ少年――もとい死神の足に突き刺さり、激痛をトリガーに発動した野郎の咆哮が薄暗い地下霊園に木霊した。

――――――

カキィィィイン

危うく死にかけた死神が慌てて人間形態を解除すると、皮膚から生えた鱗に弾かれ、体に突き刺さっていた剣が勢いよく飛散する。

「ほぇ～本当に死神なんだ」

さり気無く飛んで来た数本の剣を紙一重でかわした少女は死んだ魚の様な白い目をパッチリと開き、物珍しそうに少年の体を覆う鎧の様な鱗に手で触れる。

『死神に本物もエセもあるか！　人の体を馴れ馴れしく触ってんじゃねぇ！』

額に青筋を浮かべ力の限り吠えた死神が　バッ、と腕を振り払うと、物珍しそうに自分を触っていた少女は非力な人間の少女らしく宙を舞い、軽い音を立てて地面に打ち付けられた。

痛いよ、とぼやきながら頭を擦るゾンビ少女とそれを殴り飛ばした自分の右手を見比べる死神。

『さっきのクソヤバイインチキパワーは何処行っちまったのやら……結局何もんだお前は？』

その問いかけに少女は何か思い起こすように宙に視線を泳がせ、暫らくしてから何か思い出したように口を開いた。

「名前思い出せないから解からない……
……どうでもいいけど」

真剣に考えた末に返って来た投げやりな返事に死神の少年の額に青筋が浮かび上がる。

『名前なんか聞いてねぇよ！
あんだけ規格外の馬鹿力を出してんだ、ただのゾンビじゃねぇのは解かってんだよ
……どうやって蘇った、答えろ』

怒涛の如く押し寄せる少年の吠えから『蘇った』という単語を拾い上げた少女は眉間を寄せ、逆に問い返す。

「蘇ったんじゃなくって、キミが蘇らせたんでしょ？」

『な訳ねぇだろ！

何が面白くててめぇを蘇らせねーといけねぇんだって話だ！』

「えーと、ここは地獄だから、悪い事をした僕に罰を与えるため？」

『地獄？
何早まってんだ、ここはまだ現世（アラルースア）だぞ』

そういって天窓として嵌め込まれたステンドグラスをサムズアップした指で指す死神、それを追うように少女が見上げると、またしても右手が勝手に動いた。

ヒュゥウゥウン！　ガシッ！

『ちっ、やっぱ駄目か』

ゆっくり見下ろした手の中には黒光する剣が握り締められており、自分が握り締めた剣身の対極、柄を握り締めた死神は死神化して強面に成った顔を更に顰めていた。

「うん、厄介だよね、この身体」

『お前が言うなっ！』

思ったままの事を口にする少女を殴らんとする勢いで拳を握る死神、その拳の向こうに見える能面少女は今度は首をかしげてくる。

「アラルースアって、どこ？」

からかっている様子でもなく、至極真面目に尋ねてくる少女に死神は苛立たしげに溜息を付くと、それまでの鬱憤を晴らすように地面

を踏み鳴らしてぶっきらぼうに吐き捨てる

『脳に蛆でも湧いてんのか？
お前が今つっ立ってるこの大地の名前に決まってんだろうが！』

2．流れ行く空は虚ろな道標

Ｓｉｄｅ：深紅の死神

「アラルースアって、どこ？」

からかっている様子でもなく、至極真面目に尋ねてくる少女に死神は苛立たしげに溜息を付くと、今までの鬱憤を晴らすように地面を踏み鳴らしてぶっきらぼうに吐き捨てる

『脳に蛆でも湧いてんのか？
お前が今つっ立ってるこの大地の名前に決まってんだろうが！』

カンカンに怒ってる文字通り悪魔の様な少年に気後れする事無く、言われるがままに少女は地面に視線を落とす。

何を考えてるのかまるで無防備なその姿に思わず袖に忍ばせたナイフに手が伸びる死神だが、先程喰らったばかりの猛反撃を思い出し、忌々しげに吐き捨てるだけにとどまった。

「やっぱり解からないよ、アラルースアってどこ？
地獄じゃないのなら――もしかして天国？」

コイツ本当に脳味噌に蛆が湧いてやがんのか？

『なわきゃねぇだろ！
いいか？　お前は蘇った、それもこっちの迷惑なんてお構いなしにな。
蘇ったって事は一遍死んでるって事だ。

で、お前が死んだ場所がこのアラルースアだ、解かったか？』

「でも僕は日本にいたよ？」

鱗が生えた指で頭から生えた角をコンコンと叩く死神にまだ理解出来てないのか首を傾げる少女。

血の気が抜け切った蒼白な唇から紡がれる奇妙なフレーズに死神は『はぁ？』と首を傾げる。

『ニホン？　……何じゃそりゃ？』

「何って、国だよ？

……あ

ねぇ、ここってアラルースアって言うんだよね？」

何か思い至る節があるのか、ハッと成る少女。

先程から何度目か数えるのも面倒な質問に元から短気な死神が鬱陶しそうに首を縦に振り、肯定の意味を示すと、目の前の少女は文字通り白い目を忌々しげに細めた。

「じゃあここって異世界なんだ？

……何でこんな事するの？　ばっかみたい」

『はぁ？　異世界？

んなもんある訳ないだろ、死神舐めんのも大概にしろ！

……ってオイ、何処行きやがる！？』

眉間を寄せ、自分を責めるようなその言い草にカチンと来た死神は

中指を立たせ、年下相手にメンチを切った、が、そんな彼に少女は構う事無く、興味が無くなったように踵を返して埃を巻き上げながら螺旋階段を登っていく。

「外見てくる」

『待ちやがれ、死神から逃げ切れると思うな！』

狙った獲物を逃すまいと地を蹴って駆け出す死神、ほんの少し力を込めればへし折れてしまいそうな少女の体に狙いを定め、拳を構えたその瞬間――

「え？　それって殺してくれるっていう意味？」

何の前触れも無く足を止め、振り向く少女。

その拍子で空を振った死神は角張った階段の角に勢い良く頭をぶつけ、ゴギッ、と階段が砕ける乾いた音が木霊した。

「……何してるの？」

そう言って可哀想な物を見る目を向けて来る少女を反射的に殴り飛ばそうと拳を構える死神だが、先程の猛反撃を思い出して思わず拳を緩める。

何てヤツだ、【死の契約】をまともに喰らってんのに死ぬ気配がまるで無い

「じゃあ殺してよ」

『言ってる事とやってる事が逆じゃねぇか！
「殺して欲しい」とかほざきながら明らかに俺を殺しに来てるだろてめぇは！
……って待てっつってんだろ！　逃げんじゃねぇーっ！！』

身を屈んで死神と目線を合わせた少女だが、返って来た愚痴に文字通り白い目を細め、軽やかに立ち上がると再び踵を返した。

慌てて呼び止めるも華麗にスルーされた死神は足を引き摺るようにして階段を登っていく少女の後姿を悔しげに睨む。

『……！
ちっ、正攻法が駄目なら隙を突いて殺すしかないな』

行く手を遮る黒鉄の扉を片手で粉砕した怪力少女に背筋がゾッと成った死神は誰に言うでもなく一人ぼやいた。

――――――

Ｓｉｄｅ：蒼白の少女

粉々に砕かれた黒鉄の扉の隙間から差し込む蒼白の光に少女は眩しそうに目を細め、暗く冷たい地下の世界から逃げ出すように外に踏み出した。

雨が降ったばかりなのか、湿り気を帯びた空気と視界を遮る霧に少女は深く溜息を着く。

「……この世界も雨ばっかりなのかな？」

見上げた灰色の空は虚ろなほどに広く、見渡した大地は乱立する墓標に埋め尽くされている。

――Ｄｕｎｋｅｌ　ｉｓｔ　ｄａｓ　Ｌｅｂｅｎ，　ｉｓｔ　ｄｅｒ　Ｔｏｄ（生こそは暗く、死もまた暗い）

先が見えない霧に包まれた世界にまるで一人だけ取り残されたような少女は、陰鬱な歌を口ずさみながら墓石の森を突き進んでいく。

何となく感じる気配に振り向くと、小さな墓石から体の大半がはみ出た赤いローブの少年が視界に映った。

あれで隠れた心算なのか、少女が文字通り白い目を向けても動揺の“ど”も見せず、不審極まりない動きで墓石の後ろを移動しながら着いてくる。

「何してるんだろう？

……うざったいけど、どうでもいいや」

誰に言うでもなく呟くと、少女は前へと向き直り、寂れた墓場にこれ以上無く相応しい陰鬱な歌を再び口ずさみ始めた。

長い間人が訪れていないのか、霧の向こうまで続く広大な墓地は酷く寂れていて、添えられるべき花の変わりに錆付いた武器や防具が至るところに突き刺さっていた。

気分的にその意味を考えようと思考を巡らせた少女だが、暫らくすると『面倒臭いから』と思考を放棄してしまう。

永遠に続くと思っていた墓場を抜け切り、墓場を囲むように覆い茂った樹木の前に辿り着いた少女は霧と樹々の間から覗く城壁に目を細めた。

「……あ、お城だ。
人が居るのかな？
……どうでもいいや、関わりたくもないし」

そう言って城壁から目を逸らす少女。

だが、心のどこかで薄々と感じていた寂しさに「関わりたくもない」と言い切った少女は、気がついた時には惹かれるようにそびえ立つ城壁へと歩いていた。

――――――

Ｓｉｄｅ：赤い死神

何歌ってんだあの能面ゾンビ？

良く分からないが幸せが尻尾巻いて逃げ出しそうな嫌な音だな

少女のすぐ後ろを霊体化してストーキングしていた死神は彼女の口から時折囀られる陰鬱な旋律に苛立たしげに首を振る。

つーかあんな状態で人里に入ろうとかどういう神経してんだ？

魔物扱いされて問答無用に殺されるぞ？

……まぁ、それはそれで手を出すまでも無くノルマ達成出来るんだから、悪い話じゃない。

所々崩壊した石垣の城門を、見張りの兵士達の視線を集めながら通過する少女の姿を見つめ、ニヤリと口元が緩む死神。

不意に肌を刺すような殺意を感じ、弾かれるように顔を上げると、半壊した民家が所狭しに詰み込まれた町の一角、他の建物よりも数階分高い木製の建物の窓からこちらを睨みつける人影が見えた。

俺の姿が見えてる訳じゃなさそうだな……って事はあの能面ゾンビか

これほどの殺意をぶっ放せる強者(やつ)なら上手くいけば俺の変わりにあの能面ゾンビを始末してくれそうだぜ。

霊体化して誰にも見えないという安全感からか、舞い込んできた願ってもないチャンスに、死神の少年は小躍りしながら少女の後を着いていった。

――――――

Ｓｉｄｅ：蒼白の少女

活気溢れる――とは到底言い難い、所々壊れかけた木造の建物や、何かが燃えた痕がこびり付いた石垣の道路を腰まで伸ばした白銀の髪を靡かせながら当ても無く彷徨う少女がいた。

身に付けた、宝石がちりばめられた黒を基調としたドレスに、人形のように整った顔はその生い立ちの高貴さを窺わせる。

が、遠目に見る分には美しいが、無造作に伸ばされた長い前髪に隠された瞳は死んだ魚の目のように虚ろで、キメ細かい肌はまるで血が流れてないように白く、裸足のまま踏みしめた石垣の地面と同様にその体は温度を持たない。

そんな彼女を目の当たりにした町の住民達は皆決まって息を潜ませ、彼女の視界から離れた途端小声で会話を交わす。

「おい、あれって禍乱の姫君じゃないか？」

「ま、まさか！　あの女なら公開処刑されただろ？」

「もし、生きてたら……？」

「お、脅かすなよ！　首吊りの刑で三日間吊るされてたんだぞ？……生きてたらそりゃ魔物か何かだ」

「いや、本当に魔物かも知れないぞ、何だってあの女は……」

感情的になってつい声を張り上げた男達、その会話をさり気無く聞いていた少女がもう少し詳しく聞こうと足を止めると、それに気付いた男達は蜘蛛の子を散らすように瓦礫に埋もれた路地裏に消えていった。

……カランの姫君？

それに魔物……腐りかけたゾンビの大群や、デビ〇トリガー宜しくに悪魔変身した死神を見て来たからそれほど驚く事は無かった。

が、自分が生まれ育った世界ではない、どこか遠い場所にいるという事を改めて思い知らされた少女は心の奥底から湧きあがる、心を融かすようなすっぱい感覚に忌々しげに目を細め、灰色の空を仰いだ。

「今更、何考えてるんだろう……

……どうでもいいや、魔物がいるんだから、きっと殺してくれるよね」

不意に目の奥が熱くなり、溢れ出る液体をせき止めるように少女は目を瞑る。

またあの感覚だ……何で？

それはまるで自分ではない何者かに体を乗っ取られたような感覚――体の重心が傾いた、次の瞬間

ブヒュゥウゥウン！！

まるで棒か何かを高速で振り下ろした時のような、空気が切り裂かれる音に目を開けると、鉄釘が打ち込まれた木の棍棒が目の前を掠めていった。

その棍棒の元を辿った先にはボロ雑巾の様な亜麻の服を着た肉付きの良いの大男が立ちはだかっていた。

「姫――いや、禍乱の姫君

何故、貴様がここに居る？
……陛下を殺め、民を苦しめただけでは飽き足らず、またこの地に災いを振り撒く心算か！？」
殺意を隠す事無くぶつけてくる目の前の大男を少女はぼんやりと見上げる。
肩まで掛かった茶色の髪は煙硝に汚れ、がっしりした顎は不精髭に覆われており、鍛え抜かれた肉体を包む亜麻の服はくすみ、野蛮極まりない凶器を構えるその姿勢はしかし、気品に満ち溢れていた。
だからカランの姫君って何？　この体の名前なの？
……どうでもいいや、それよりもこの人強そうだなぁ……
この人なら僕を殺してくれるのかな？
「うん、そうだよ」
胃の中身を吐き出してしまいそうになる程の殺意を正面から受け止め、挑発するようにあっさりとした返事を返す少女に不精髭の男の表情が更に険しくなる。
「黙れっ！
その口で喋るな！　その顔で笑うな！」
不器用に口元を吊り上げる目の前の少女に、怒り狂った男は握り締めた棍棒を振り上げ、威嚇するように声を荒げた。
そんな彼を少女はぼんやりと見上げたまま、まるで親の抱擁を受け

入れる無邪気な子供のように両手を広げる。
その姿に男の手が一瞬ブレる、が、迷いを振り払うように首を振ると、目の前の少女を断ち切るように醜悪な凶器を縦に振り下ろした。

ブヒュッ、ガッ！　ゴキメキッ！！

「……やっぱり」

腹を押さえた手から鮮やかな血をぼたぼたと垂らし、視線だけでも射抜き殺す、と言わんばかりに睨みつけてくる目の前の男と、彼から奪い取った棍棒を見比べた少女は吐き出す息と共に呟いた。

「ぐっ……！　貴様、やはり……！！」

「そこまでよ！
誰か、姫様に無礼をはたらいたこの逆賊を捕らえなさい！」

肉が抉れ、血が止め処なく流れ出す無数の傷口を握り潰すようにして止血した男の背後から甲高い女の声が響く。
その声に応じるように何処からとも無く赤い二匹の龍のエンブレムが刻まれた鎧を着込んだ兵士達が駆けつけ、男を取り囲んだ。

「……どうしたのでございます？
その者はリィンガルム王朝唯一の正統継承者であるイースベルガ・ダルダント様に刃を向けた逆賊なのです、今直ぐ捕らえなさい！」

「違う！　そいつは『誰か、彼を捕らえなさい！』」

その声を合図に、男を取り囲みおろおろとしていた兵士達が意を決したように頷き、腹の傷を押さえながら少女に近づこうとする男を取り押さえた。

そんな彼を横目で確認した、茶色の素朴なドレスに身を包んだ女性はその蒼い瞳を少女に向けると、裾を手で摘まんで優雅に一礼をした。

「申し訳ございません、姫様。
陛下が崩御なさってからと言うものの、あのように王家の血筋を根絶やしにしようと目論む輩が後を絶ちません」

そういってチラリと男を横目で捕らえると、素朴な衣装を着込んだ女性は少女に視線を戻し、煌びやかなドレスの袖から覗く繊細な指に纏わりついた赤黒い液体に目を凝らす。

「あら、その手は如何なさったのでございますか？
……いえ、先ずは場所を変えましょう、こんな所にいては何時また刺客が現れるやも知れません」

そういって手を差し伸べてくる自分より頭二つ分高い女性を少女は暫らくぼんやりと見上げ、「……どうでもいいや」と呟くと、小さく頷いた。

――――――

閉ざされた窓のガラスを通して差し込む蒼白の光と、蝋燭の光に照らされた薄暗い室内。

水を汲む音や、タオルを捻る音だけが途切れ途切れに響く空間の中、

未だ自分の物という実感が湧かない白く繊細な指先にこびり付いた赤黒い血液を丁寧に拭い去っていく目の前の女性をただ漠然と視界に映していた少女は不意に口を開く。

「ねぇ、リクハルドさんはどうしたの？」

先程の男を取り押さえる衛兵が口にした名前をただ何となく尋ねてみる少女。

血の気が引いた蒼白な唇から紡がれるその言葉に俯せていた女性は弾かれるように顔を上げた。

が、無表情のまま文字通り白い瞳で見つめてくる少女の姿を認めると、強張った表情のまま、女性は強引に笑顔を浮かべてみせた。

「恐縮ですが、姫様、リクハルドとはどなたでございましょうか？……記憶が混乱しているのでございますね？」

それはどう言う意味？　と言いたげに首を傾げる少女に女性は頷き、落ち着いた声で言葉を紡ぐ

「先程もお伝えしたように、陛下が崩御なさってから王家の血筋を絶やそうとする不届きな輩が後を絶ちません――そこで先王の遺言に従い、リィンガルム王朝唯一の正統後継者である姫様を王家の墓に匿う事になりました。
本来なら事のほとぼりが冷めてからこちらから使者を送る手筈だったのですが……誠に申し訳ございません」

自分から視線を逸らすように慌てて目を俯せる目の前の女性に少女は興味無さそうに「ふぅん」、と頷くと、目の前の女性に問いかけ

る。

「それで、結局オバサンは誰なの？」

「オバ……！　いいえ、記憶が混乱しているのでございましたね、私は姫様の世話係りを勤めさせていただいてるタマーラでございます」

自己紹介を済ませたタマーラに興味が無くなったように目を逸らした少女は窓から覗く灰色の空をぼんやりと眺め、それっきり何も話そうとしない。

そんな彼女の手を同じように無言で拭い終えたタマーラは澱んだ水が入った盆を下げ、一礼すると

「では私はこれにて、御用がございましたら何なりとお申し付け下さい」

と言い残し、再び一礼してから木製の扉を閉じた。

まだ乾ききってない手と、部屋の片隅に放置された、微かに異臭を放つ澱んだ水を見比べると、少女は腰を掛けていた木製の椅子から立ち上がり、冷たい光が差し込む窓辺に立つと勢い良くカーテンを閉めた。

「ふぅーん、お姫様、ね……」

蝋燭の明かりが唯一の光源となった室内を見回し、何か言おうと口を開きかけた少女だが、言葉を発する前にその小さな口は噤まれた。

別にどうでもいい――小さな体を壁際に預けた少女は、ほんの少しだけ感じる冷たさに目を閉じた。

――――――

Ｓｉｄｅ：深紅の死神

「っざけんな！
んなどうでもいいネタに金なんて払ってられっか！」

ホットミルクが入った木製のジョッキをカウンターに敲き付け、怒鳴り散らす目つきの悪い少年にカウンターに肘を付け、耳打ちするような姿勢を取っていた酒場の主人は盛大に顔を顰める。

「おいおい兄ちゃん、こんなご時勢であんたに嘘ついて何の意味があるんだい？
情報量は２０銅貨だ、ほら出した出した」

飲み客達の視線が集まる中、目つきの悪い少年は手の甲に付いたミルクを舐め取ると　ちっ、と舌打ちし、深紅のローブのポケットから鋭い光を放つ白い硬貨を取り出して目の前の男に投げつけた。

「おっと、
……おお、銀貨じゃないか！」

「釣りはいらねぇよ、代わりに知ってる事包み隠さず全部吐き出しな」

「……ああ、解かった。
さっきの話だが、あんたが言ってるその地下霊園は王家の墓で間違

いない。
だが忍び込む心算なら気を付けろよ、何だってその中に埋まってるのはあの禍乱の姫君なんだからな」
「はぁ？　カランの姫君？」
聞き覚えの無い単語に少年は口に含んだミルクを一気に飲み込み、カウンターに飛散したミルクを拭き取っていた酒場の主人を見上げる。
そんな少年を値踏みするように眺め回した酒場の主人は訝しげに眉間を寄せた。
「知らないのかい？
……こいつぁ驚いた、まさかこのベルセラ大陸で禍乱の姫君を知らない人間がいたとは」
「悪かったな、人間共の問題には興味ねぇんだよ」
さり気無く吐き捨てた少年は目の前の男が訝しげに見てくる事に気付き、「何か文句あんのか？」とガンを飛ばすと、男は両手を上げ、「何でもありません」と首を振ってから話を続ける
「禍乱の姫君っていうのはこのリィンガルム公国を滅ぼしかけたイースベルガ姫に付けられた異名さ。
空を見てみろ、ずっと曇りが続いてるだろ？
……これはな、禍乱の姫君が力を振るったせいなんだ」
そういって木枠の窓から覗く虚ろな空を顎でしゃくった酒場の主人。

促されるがままに振り向いた少年の表情が段々と険しくなる。

……確かに気味悪い魔力が渦巻いてやがるな

魔力の流れを感じようと目を閉じた途端闇に堕ちた視界を白一色に塗り潰す凄まじい魔力の奔流。

心を侵蝕され、感情を呑み込まれていくような空虚な感覚に少年は慌てて目を開いた。

「おいマスター！　そのイースベルガってヤツの事をもっと詳しく教えろ」

「いや、悪いがそこまでは流石に知らないな」

そう言って申し訳無さそうに頭を掻き、笑って誤魔化そうとする酒場の主人。

だがそんな愛想笑いで誤魔化せるほどお人好しな少年ではない。

目の前でどんどん険しくなっていく少年の目線から逃げ出すように酒場の中を見回した酒場の主人の視線は酒場の一角で静かにグラスを傾けていた大男に止まった。

「おーいリクハルド！　ちょっと顔貸せ！」

酒場中に響き渡るような声を張り上げる酒場の主人。

だが、呼ばれた大男は無言のままグラスを口に付けるだけで反応を示さない。

「おいアンタ、近衛隊隊長だか何だか知らないが王家があの状態だ、くだらない意地張って無いでさっさと来い！
……ツケが溜まってんだろ？」

清々しいほどに完全無視された酒場の主人は盛大に眉を顰め、カウンターの引き出しから帳簿を取り出し、チラつかせる。

だがそれを横目で捕らえたリクハルドにギロッと睨まれただけで「ひぃっ」と短い悲鳴を上げて頭を下げた。

「な、なぁリクハルド、ちょっと来てくれよ……アンタの主について尋ねたいってガキがいるんだ」

さっきとは打って変わって猫撫で声で恐る恐る尋ねる酒場の主人。

そんな彼の言葉を目を閉じ全て聞き流していた男だが、「主」という言葉に反応してグラスを握り潰してしまい、酒場の主人は「ひぃっ！」と短い悲鳴を上げるとカウンターの下に隠れてしまった。

そんな酒場の主人を気にも留めず、リクハルドはその傍でホットミルクをがぶ飲みしていた少年を睨みつけた。

「……あ？」

睨み付けた少年に睨み返されたリクハルドの表情が一層険しくなる。

「……イースベルガ様の事を知りたいだと？
牛乳如きで酔ったのか小僧？」

「へっ、今にも死にそうなヤツが何ほざいてやがんだ？
知ってる事を包み残さず全部吐きやがれ、褒美に楽にしてやる……
死んで喜びな」

殺意を隠す事無くぶつけて来る男の挑発に怯む事無く挑発し返す少年。

飲み干したジョッキを投げ捨てるその動作に緊張の欠片もない。

「ふっ、面白い餓鬼だ……名は何と言う？」

「てめぇに名乗る名はねぇな」

「ならお前に語る言葉もないな」

ぶっきらぼうに吐き捨てた少年にわざとらしく背を向け、席に戻ろうとするリクハルド。

椅子の上で足を組んでいた少年は苛立たしげに舌を打つと、一瞬でリクハルドの前に滑り込んだ。

「待てよ……ポストゥクスだ」

不機嫌この上なしの顔で名乗った赤いローブの少年を見下ろし、リクハルドはフッ、と笑うと近くにあった椅子に腰を下ろした。

「私の名はリクハルド・クロンクヴィストだ。
イースベルガ様の事を聞きたいのだな？
……いいだろう、教えてやろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9115x/

Let Me Die ～転生先はゾンビ少女～

2011年10月26日08時13分発行